

ゼネコンのイメージ悪化打破



建設産業の魅力伝えます

公共事業に対する社会的批判は根強く、不祥問題などによって建設産業に対するイメージは悪化、建設会社への就職希望者も減少している。こうした現状を打破する目的で、主に中堅ゼネコンの労組で構成する日本建設産業職員労働組合協議会（日建協）が実施しているのが、大学に出向き建設産業の魅力を直接伝える「出前講座」だ。

役員らが講師に

講座は2006年から始めており、就職活動が本格化する

法大工学部都市環境デザイン工学科（東京都小金井市）の出前講座には約100人の学生が出席。ゼネコンへの就職に関心を持つ割合が大幅に増えた

日建協が各大学で「出前講座」

る11、12月に集中して開講している。07年は法大、名古屋工大、北海道大、大阪工大で実施した。講師を務めるのは、日建協本部の役員と参加組合員。自らが従事する工事の進め方だけではなく、入社動機など、プライベートな内容を織り交ぜながら紹介する。

法大工学部都市環境デザイン工学科で行われた講座には約100人の学生が出席、社会資本整備や環境対策の重要性について講義を受けた。このほか、五洋建設の小澤真氏が現在携わっているシールド工事の現場を題材として工事の目的や、ゼネコン職員の働き方などを伝えた。奥村組の福士健太郎氏は、これまでの自分の経験を元に働く意義などをアピールした。

工事目的、働く意義…効果てきめん

5割超が好回答

効果は顕著に表れている。アンケート調査によると、受講前の「ゼネコン志望者」は約1割（複数回答）に過ぎなかったが、講義終了後は「ゼネコン希望」と「ゼネコンも選択肢の一つとして考えてみたい」と回答した学生が両方合わせて、5割を超えた。

また、自由筆記の中では「ゼネコンのイメージが変わった」という意見も目立った。

出前講座の終わりには、ネットによる日建協の相談窓口アドレスが紹介され、講義後にも建設産業に関する質問・相談をフォローする仕組みとなっている。

日建協では「建設産業に対する偏ったイメージを払拭し、一人でも多くの学生に産業で働く素晴らしさを知ってもらいたい」（青本健吾議長）としており、今後も随時実施していく計画だ。